

浄土

1977 - 8

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 四月一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (公) 第百四十六号
昭和五十二年七月二十五日印刷 昭和五十二年八月一日発行
第四十三卷 第八号



老後の世界



日本人の平均寿命が、女性は七十七歳の喜寿に達し、男性も七十二歳を超え、世界一のスウェーデン並みになった。これは戦後の環境衛生をはじめ医学の進歩である。

しかし一方では老人問題は、大きな社会問題となった。戦前でも老人問題はあった。

それは三世大家族（大家族）の中で、ファミリーサイクルというか、働き手の交替がスムーズに行われた。一方現在のような、インフレとデフレが共存のスタグフレーションといわれる経済状態では、年金や退職金だけではとても生活は出来ない。まして核家族化（夫婦と未婚の子供）がすすんで行く都市化現象の世の中では、老人の同居したい希望はかなわない。

老人問題は、この経済的な問題が第一だが経済だけでは解決できない情緒的なものがある大きな問題であろう。敬老の日などをもうけ、はでな行事が行われるが、それよりじみな老人対策を考えてもらいたい。日常世話する人

のいないために、軽費老人ホームや、養護老人ホーム、寝たきり老人のための特別養護老人ホーム等、施設の充実も勿論重要であるが、老人が暖かく生活出来る家庭が第一である。

特に有料老人ホーム等に扶養出来る能力がありながら親を入れている人があるが、いずれ我が身にもかかわる問題として考えて欲しい。

我が国でぜひ考えて欲しいのは、年金の問題、先進国でただ一つ積み立て方式をとっている問題と、老人と同居して親を扶養しているサラリーマンに対する所得控除を早速に行ってもらいたい。核家族化をつづけて行くとは時までたつても住宅問題は解決しない。

冠婚葬祭というタイトルの本がベストセラーになることは、核家族化がすすみ、家の慣習が伝わらない証拠である。

宗教においても、家の宗教としての伝承も稀薄になって行く。その上個人の宗教心がうすれてしまつては大変である。（佐藤行信）

八月号



浄土門トイフハ、
極楽ノ得道ナリ
——『浄土宗大意』

目次

法 話

懐旧の情.....	長 田 善 弘	...(2)
真 実 心.....	佐 藤 心 岳	...(6)

＜人生読本コーナー＞断念と詩.....	石 原 吉 郎	...(19)
＜特 別 寄 稿＞お念仏と指揮者.....	佐 藤 菊 夫	...(24)

いのちを考える⑤＜余暇＞

余暇（レジャー）について.....	望 月 嵩	...(10)
愛と信の輪.....	森 邦 夫	...(14)

＜随想＞ 心のままに〔七〕.....	川 内 知 光	...(32)
--------------------	---------	---------

お経のページ 法華経.....		...(34)
-------------------	--	---------

＜読者の声＞ 信仰への道

法然上人の問答から教えを求む.....	吉 村 孝	...(27)
＜表紙裏・巻頭言＞ 老後の世界.....	佐 藤 行 信	
念仏ひじり三国志⑩——法然をめぐる人々.....	寺 内 大 吉	...(35)

表紙 久住静雄 画
カット 大正大学美術部



懐旧の情

おさ だ ぜん こう
長 田 善 弘

(浄土宗関東布教師会副会長
今市市法蔵寺住職)

「思い出は懐かしい。懐かしいということは悲しいことである」と、尾崎士郎は彼の著書『人生劇場』の登場人物である吉良常に述懐させています。

たしかに思い出は懐かしいものであります。

もう既に四十余年になりますが、卒業を間近かに控えた宮林大昭先輩が、色紙大の厚紙に「智に働けば角が立つ。情に棹せば流される。意地を通せば窮屈だ」と、夏目漱石の草枕の冒頭の一節を書いて下さった。先輩はこれについてなんの解説もされず、ただ手渡して下さったのでしたが、「とかくこの世は住みにくい」と非人情の世界へ旅立ち、そこに詩が生れ、画が出来るという漱石の心

情は、若い私には充分汲みとることは至難でした。しかし、私は私なりに勝手に解釈して、住みにくい世の中をなんとか少しでも住みよい世の中にするのが、私達に課せられた責務ではなからうかと単純に受け止めたものでした。

惜しくも宮林大兄は支那事変で散華されて了われた。

「もし許されるなら更に更に学究を続けたい」と、よく漏らしておられたが、厳父の遺志を継がれた方が、大正大の宮林昭彦先生であります。わずか一年間、寮で寝食を共にして受けた指導でありましたが、私に一つの方向を与えて下さった思い出の人として懐旧の情に絆され、在りし

日を偲びつつ筆を走らせるにいたったのであります。

旧盆に寄せて、なにかと書くことを約した私が、なにかを書くとするならば、お盆とは、祖先、先亡、知己への懐旧の情を抜きにしてはその意義を失うと、断言出来ることではありません。

「盆はうれしや別れた人も、晴れてこの世に会いに来る」との盆唄の通り、精霊棚をしつらえて新しい真孤に季節の野菜やら、手作りの馳走、他方からの頂き物を経て、十三日に精霊を迎えて十六日に送る迄、常になく誠意をつくして給仕する。これこそ心温まる家庭の行事であり、まつりの至高なものでありましょう。

私達は皆両親から生まれました。両親もまたその両親から生れたのです。これを二十五代前に遡ると、ご先祖の数はなんと三三、五五四、四三二人にもなります。これだけ多くの先祖の生命を通して今日の私があることを思うとただ感謝あるのみです。お盆を迎えるに当って一層この感を深めたものです。

都会の方々には思いも及ばないことでしょうが、まだ土葬の風習が残っている地方ではお盆が近づくと雑草に

覆われた墓所の草刈りやら草取り等、日頃の無沙汰をお詫びでもするように清掃する。丈高い雑草の中から苔むした墓碑が姿を現わす。そして「在りし日の背を洗う」と墓洗う一風景も見られます。十三日には家族揃って香華を手向けて祖先を迎える。十六日朝お送りする迄の四日間は、先祖様と一緒に一つ屋根の下で過ごす。そして家族一同で祖霊を慰める。先祖の位牌を守る実家は盆中、兄弟姉妹孫等の来訪で特に主婦はその応待で大業である。解放されるのは十六日以降ということになりますので、地方によっては主婦の解放される十六日をウラ盆と呼んでいます。

本来お盆とは盂蘭盆(ウランバナ)である筈ですが、いつの頃からか表と裏の裏をとって、混同した呼び方をするようになっていますが、これもまた面白く思われます。しかしただ面白くだけでは済まされない根本的な名称なので、寺報やお盆の集りには盂蘭盆の本来の意味を繰返しお話をしております。

ウランバナの日本語訳「救倒懸」については、『盂蘭盆経』に詳しく説かれております。それによりますと、釈尊

の十大弟子の一人目連尊者の母は世にも稀れな悪女でありましたから、生前の業によって死後餓鬼道に堕ちました。目連は死後の母を想い神通力を以って、天上界から人間、修羅、畜生、餓鬼と母の姿を求めました。あわれにも母は餓鬼道に堕ちておりました。食あれど食するのとあたわず、水あれど喉を潤すことあたわず、恰も今でいう栄養失調も甚だしい哀れな姿を眼の当りにしまして、眼に涙溢れるまま釈尊にその救いを請われました。

釈尊は、「汝の母は生前の業に依って、かかる世界に苦しんでいるのである。七月十五日は夏安居の最終日に当り衆僧が集い会う日であるから、衆僧と共に孟蘭盆会を修するがよい」と、『孟蘭盆経』を説かれました。目連は衆僧に請うて、孟蘭盆会を修しました処、その功德たちどころに現れ、母とそして共に苦しみ悩む多くの亡者達は天上界に生れ合われたのでした。

目連のこの追孝の念いが、お盆として今日に受けつがれているのであります。

現今、核家族化が著しく、家族の断絶等、寒む寒むしい世相を見聞するにつけお盆のまつりを通して、もう一

度人間の原点を見直したいと思う心切なるものがあります。

私はよく「縁はいなもの、味なもの」と、いろは歌を引き合いに出しますが、この不思議な縁を、有難く受けて育てて行くということは大切なことであります。もし私が、四十数年前、何の目標も自覚も無いまま、大正大学の門をくぐったあの日、宮林先輩との出会いがなかったら私の人生の行路はあるいは大きな違いがあったかも知れません。そして今それを有難く受け止めさせて頂いたことにいい知れない喜びを感じております。

法然上人は『一紙小消息』に「受けがたき人身をうけて、あいがたき本願にあいて、おこしがたき道心を発して、はなれがたき輪廻の里をはなれて、生れがたき浄土に往生せんこと悦の中の悦なり」と仰せられておりますが、人身は正しく両親から受けたものであります。この縁は切ろうとしても決して断ち切れるものではありません。更に遡つての先祖との縁もまた然りであります。この縁を有難く受け止めて、生かすことこそ己れ自身をも生かすことであることを思えば、祖先が還って来られる

というお盆こそこの縁をいよいよ生かすよい機会ですの
で、心してまつりごとを行うべきであると思います。

しかも数多い仏法の中から、あいがたき弥陀の本誓願
にあわせて頂き、浄土念仏の教えにあうことの出来たこ
の有難い縁こそ生かして行くべきではないでしょうか。

私に当年三歳になる男の孫がおりますが、私と一緒に
入浴する度に、「願我身淨如香炉」から「我昔所造諸惡業」
の懺悔の偈に続いて南無阿弥陀仏十遍唱えて上がること
にしていますが、なんの抵抗もなく、悦んで大声を張り
あげております。ある時一緒に車で出掛けました折、急
に、「おじいちゃん、一心敬礼があるよ」と指さす彼方
に、お寺の薨が見えました。帰宅して一同大笑したこ
とでした。別に三歳からお経を教え込むという強い意識
があつてのことではありませんが、仏飯を食み、弥陀の
本願に生かされている私にとっては、幼い心にもこうし
て馴染ませたいとの思いからでもあります。

馴染むということは相統する処から生れます。法然上
人は、念仏者の生活態度として四修（念仏策励のきまり）
を示されておりますが、その三に、無間修として念々相

続であることを勧めておられます。

声に出して南無阿弥陀仏を唱えることに、抵抗がある
いは気恥かしさを感じている方もあるようですが、それ
は充分馴染んでいないからです。念仏との縁を生かさう
となさらないからです。

法然上人は『常に仰せられる御詞』の中で、「名号を
きくといふも、信ぜずば聞かざるが如し、たとへ信ずと
も唱へざれば信ぜざるが如し、只つねに念仏すべし」と
仰せられております。

お盆を迎えるに当りご先祖の墓碑の前で声を出して念
仏を唱えてはみませんか。

私の知人で「朝夕仏壇の前で礼拝していますが、いつ
も喉の底で念仏を唱えているものの、ついつい声にはな
りませんでしたが、ある動機（本山へ団参して）から、声
を出して念仏が唱えられるようになりました」とうれし
そうに語ってくれた人がありましたが、お盆というよい
機会を逃さず今年こそ、お念仏のご馳走を一盛り加えよ
うではありませんか。



真実心

佐藤心岳

(仏教大学助教授)

○

アメリカのカーター大統領は、かれの人生のある時期に「将来は牧師になりたい」と真剣に考えていたことがあったという。また最近では、「かれは大統領になるよりも牧師になっていたほうがよかったのではないか」とさえいう人がある。いずれにしても、これらのことは、かれがいかに宗教的な人格の持主であるかということをよく言い表わしているように思われる。

ところで、かれのこのような宗教的な人格はいったいどのような形づくられたのであろうか。かれは、四

歳から十五歳までの間に、父から六回ほど鞭でたたかれたという。父の制裁は、細長くて弾力のある桃の木の鞭でおこなわれたというが、その最初の経験について、かれは自叙伝のなかで次のように述べている。

「鞭でたたかれたもつとも鮮明な記憶は、私が四歳か、五歳の時だったと思う。日曜学校に行く時、父は、献金用のお金として私に一銭銅貨をくれるのがならわしだった。礼拝が終って家に帰ると、日曜学校用の服をぬぎ、ポケットに入っている物をぜんぶ洋服ダンスの上に置くことになっていたのだが、その日、私のポケットか

らは、二枚の一本ニーがでてきたのであった。この二本ニーは、献金集めの皿が出席者の間に回された時に、献金を皿の上に置かなかつたばかりでなく、その皿にあった他の一本ニーもかすめとってしまったお金だった。そのことが父にみつかつてしまったのである。その二本ニーは私が盗んだ最初で最後のものではあった。」（酒向克郎訳『なぜベストをつくさないのか』十二頁、英潮社、一九七六年）

このように、カーター大統領は、わずか四、五歳のときに「人生にとって最も大切なものは何であるか」ということを父の鞭によって教えられたのである。これを契機として、かれの強靱な宗教心が芽生えはじめたことは疑いないが、しかし実際に、このようなことがなかったとしたならば、この世にカーター大統領は出現しなかったかもしれない。もしもわれわれが「われわれの人生にとって最も重要なものは何であるか」と人に問うならば、大抵の人は、「おそらくそれは財産や名誉や地位である」と答えるであろう。しかし実際問題として、ここに列挙したような財産や名誉や地位を充分に手にいれた人

が、それだけで有意義で充実した人生を送ることができるとはかぎらない。

現実に日本には、ある意味において、個人としては最高の名誉や地位や財産を手にいれて、総理大臣にまでなった人がいるが、その人の人生は果たして充実して有意義なものであるといえるであろうか。そのような人生が有意義で充実したものであるはずはない。かれは、総理大臣になって二カ月目に、あるアメリカの民間会社から五億円をもらって、それを自分のポケットに入れて、知らん顔をしていたのである。しかし、これは、考えてみれば実に驚くべきことである。われわれは、ついこの間まで、私利私欲のために嘘八百を並べたて、国民の前で平気で嘘をつくような総理大臣をもっていたのである。しかし、われわれは、いまここに改めて、そのような人物を育てあげたわれわれ日本人自身の体質を深く反省してみなければならぬ。

人びとが正しい方法で名誉や地位や財産を手にいれるのであれば、それはまことに結構なことである。しかしそうでない場合には、それは大いに非難されるべきである。ところで、われわれの人生にとって最も大切なもの

は何であろうか。それは、いうまでもなく真実心である。およそ真実心の欠如した人生というものは、何人にとっても無意味なものであるといわなければならない。

○

先日、わたくしはひじょうに不愉快な経験をした。その経験というのは実は次のような事柄である。講義のときに、わたくしは学生たちに一枚二十五円のプリントを四枚ずつ配って、それを基にして講義をはじめた。その講義の半ばで、わたくしは「このプリントは一枚二十五円ですから、合計で百円です。授業が終わって帰るときに、この机のうえに置いていきなさい」といって講義をつづけた。講義が終わると、学生たちは、それぞれわたくしの机のうえに百円ずつ置いて立ち去っていった。

そこで、わたくしは、十四名の学生にプリントを配ったので、当然ここに合計千四百円あるはずであると思つて教えてみると、実際には千三百円しかなかった。このときに、わたくしは、いうにいわれぬ大きな衝撃をうけた。たった百円のことで大したことはないではないか、といつてしまえば、それまでのことであるが、しかし、

わたくしは直観的に「これはひじょうに重大な事柄である」と思った。わたくしは、学生のうちのだれがプリントを受けとりながら、その代金としての百円を置いていかなかったのかということを知らない。

しかし、わたくしは、わたくしの講義を受けている学生のなかに、たった一人ではあるが、このような行為をした学生がいるということに、一抹のわびしさを感じないわけにはいかなかった。この行為をそのまま見過ごすわけにはいかないので、わたくしは、これに対して（カーター大統領の父のように鞭でたたくわけにはいかないが）何らかのかたちで制裁を加えなければならぬと思つてゐる。もしもその学生が真実心というものを少しでも認識していたとするならば、かれは、そのようなはしたない行為をしなかったはずである。

わたくしはまた次のようなひじょうにいやな経験をすることがある。友人と二人で、ある会合の帰りに、わたくしは、空腹を感じたので、その友人を誘つて、そばを食べるためにあるそば屋へいった。その店はとくに「にしんそば」が有名であつたので、われわれは二人とも一杯三百五十円の「にしんそば」を食べた。帰りに、

わたくしがレジスターのところへ行って、一万円札で二人分のそば代七百円を支払うと、係りの二十七、八歳ぐらいの女性はまず三百円のつり銭をくれた。その瞬間に、その女性はちょっと躊躇した素振りをみせたので、これは少しおかしいと思ったが、しかし残りの九千円のつり銭をやがてくれるであろうと思って、そのつもりでしばらく待っていた。すると、その係りの女性はまったく素知らぬ顔をして、「どうもありがとうございます」という。まるで狐につままれたようなものである。

そこで、わたくしが「一杯三百五十円のにしんそばを二杯食べて、一万円札を出したのに、どうして三百円しかつり銭をくれないのか」というと、その女性は、一瞬、雷鳴がとどろいたときに驚いて顔を紅潮させた。それで、わたくしはその女性に「一万円札と知りながら、千円札を受けとった振りをして、三百円のつり銭を渡したのか」というと、その女性は正直というか何というか、「そうです」と素直に答えた。わたくしは、その女性のあまりの正直さ(?)に気分をよくして、「どうもすみませんでした」という謝罪のことばとともに、その女性の差し出す残りの九千円のつり銭を受けとって、

友人といっしょにその店を出ていった。ところで、その女性は どうしてそのようなことをしたのであるうか。それはおそらく、われわれ二人が会合で少しお酒を飲んで、酔っているように見えたので、つり銭を少々誤魔化しても分らないと思ったからであろう。

○

カーター大統領は、幼少のころに日曜学校で献金集めの皿のうえの一ペニーをかすめとって、それがみつかつて、父から容赦なく鞭でたたかれたというが、それによって、かれは生涯を通じて人一倍の敬虔な宗教心をここに抱くようになった。ところが一方、プリント代百円を出さなかった学生といい、そば代のつり銭を誤魔化そうとした女性といい、かれらにきびしい鞭を加える者はだれもいないのである。その意味において、かれらはきわめて不幸であるといわなければならない。このような行為は、所詮、かれら自身の真実心の欠如に由来するものである、しかし、われわれもまた、この問題を他人事ではなく、われわれ自身の問題として深く考えてみなければならない。

いのちを考える

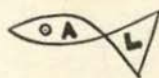
(五)

— 余暇 —

余暇（レジャー）

について

余暇あるいはレジャーは、もともと「時間」を意味する言葉である。すなわち、一日二十四時間から、睡眠や食事など生理的欲求を充足するための時間と仕事や学習に用いられる労働時間を除いた「余りの時間」がその本来の意味であった。したがって生活のために多くの労働時間をさかねばならない「貧乏暇なし」の庶民にとっては、余暇は無縁のものであり、あったとしても激しい労働による疲労



もち

望月

(大正大学助教授)

たかし
嵩

をいやすための休息にあてられる時間の意味しかもたなかった。しかし、生産技術が進歩し、社会が発展するにつれ労働時間が短縮されるようになると、余暇は一部の特権階級のものだけではなく、一般大衆もその生活のなかに多くの余暇をもつようになった。それにともない、余暇は単なる「余り」の時間ではなく、より積極的な意味をもつようになったのである。

生理的時間は生物体としての生存を維持するために必要な自然的拘束時間であり、労働時間は社会的存在としての生存を維持するための社会的拘束時間としてとらえることができる。これに対して余暇はこうした拘束から解放された自由時間である。その時間を何に用いるかは個人の自由な意志で選択できる。拘束時間は、人間に対してある特定の行動をすることを要求するが、自由時間は何をしなればならないかが定まっていないという性格をもっている。こうして余暇は、「余りの時間」から「自由時間」へと性格を変えることによって、「時間」の概念から「行動」の概念へと転化することになった。すなわち、これまでは、余暇がどれくらいあるかという量（時間）の問題であったが、今日では自由な時間をどのようにすごすかという質（行動）の問題となったのである。

余暇行動は、個人の好みによって自由に選択することができるのであるから、その具体

的行動は千差万別である。今これを整理すると次の四つのタイプにわけられるであろう。

(1) 休息としての余暇行動……余暇行動の原初的形態であり、ゴロ寝などに代表される。これは、あすの仕事にそなえて行なわれるもので、労働と対置される余暇行動である。

(2) 受動的余暇行動……テレビや映画を見たり、スポーツや演劇の観客などに代表されるもので、楽しみの要素を強くもつ。休息としての余暇行動に近く、あすへのエネルギーを貯えることが目的とされていることが多い。

(3) 能動的余暇行動……みずから演技し、実行するタイプの余暇活動で、観客的立場にある受動的余暇行動とちがって、参加者となって活動するものである。さまざまなスポーツをしたり、碁や将棋などを楽しむなどがこのタイプの余暇行動である。それはエネルギー

の蓄積よりもその発散を目ざしており、気晴しという性格をもっている。

(4) 創造的余暇活動……日曜大工や社会奉仕活動を行なうなどがその例である。これは自分の楽しみのためだけではなく、他者へのサービスという性格をもち、働くレジャーとも言えるものである。しかし、拘束時間に行なわれる活動とは異なり、物的報酬を期待して行なうのではない。

こうした余暇活動の内容そのものは、労働としての行動と全く同じである場合もある。たとえば、野球をやるのはプロ野球の選手にとっては労働そのものであるが、町内の野球に参加するのは、余暇活動である。昼休みの時間に碁を打つのは余暇活動であるが、プロの碁士が碁を打つのは、すべて労働である。では、余暇活動が余暇活動となる所以はどこにあるのであろうか。すでに述べて来たこと

からも明らかのように余暇活動には次のような共通点が存在する。(1)自己目的であること、(2)拘束され、あるいは強制されるものではなく、自分の好きでやるものであること、(3)物的な報酬を期待して行なうものではないことの三点である。このような条件を備えた行動が余暇活動である。

ところでこうした余暇活動はどのような意味をもっているのであろうか。余暇の研究者として知られているフランスの社会学者デューマズディエは、(1)休息、(2)気晴し、(3)自己開発の三つの機能を指摘している。休息は労働による疲労からの回復をもたらすものであり、余暇の基本的機能である。すでに述べたようにかつては余暇はほとんどこの休息のために用いられていた。能動的余暇活動や創造的余暇活動は、身体的活動をとめない疲労が翌日にもちこされ、しかも多額の費用もかかるということで、あまり歓迎されなかった。しかし今日では、労働時間の短縮や仕事の合

理化、機械化などによって、肉体的疲労は減少し、休息の機能はあまり重要視されなくなっている。

現代の労働は、肉体的疲労よりも精神的疲労を増大させる傾向にある。細分化された単調な作業や管理体制の強化は、いわゆる人間疎外の現象を生み出した。この疎外された現代人にとって、余暇の気晴しの機能は極めて重要なものとなっている。休息が人間を疲労から回復させるように、気晴しは人間を退屈から救出するのである。人々は気晴しを求めて日常的世界からの脱出をはかる。その脱出が架空の世界で行なわれるのが、映画や演劇の観客となる受動的余暇行動である。そこに登場する主人公に自己を投射し、同一視することによって、その気分を楽しむのである。脱出を現実の世界で行うのが、能動的余暇行動である。旅行は場所と生活のスタイルを変えることによって日常生活とは異なった気分を味あわせてくれるし、スポーツは生活のり

ズムを変化させ、攻撃的欲求や不満を昇華させるのである。こうして現代においては、気晴しとしての余暇行動がその主流となっているのである。

このように日常的世界からの脱出をもたらし余暇行動は、さらに一歩進んで人々により広いものの見方や考え方ができる機会を与えてくれる。すなわち、余暇の自己開発の機能である。義務的労働から解放された人間は、自ら選んだ自由な行動としてさまざまな社会活動に参加したり、自分の可能性を確かめたり創造性を発揮する場を余暇の中に見出す。それは、新しい創造的態度の形成を助け、自己実現への道を切り開く。

余暇はもはや人生における「余り」でもなければ「休息」でもなく、人生を充実させるために必要欠くべからざるものであり、人生そのものとも言える。労働のための余暇から、余暇のための労働という転換がおこりつつあるといってもよいであろう。それはまさ

に「いのちの洗濯」であり、生命をリフレッ

愛と信の輪

うっとうしい長い雨の季節が終ると、急に目の前が展けたように明るい初夏が訪れる。そして、さまざまな形容で自然の現象が、私達にその訪れを告げてくれる。

自然はいつでも、愛情があつくて、素直でしかも律気な正直者だから好きである。

その自然のなりわいの中で、梅雨のあとのこの季節を待ちかねたように鮮かに彩り開花する、初夏のはしりの風物詩とも云えるものに私の大好きな紫陽花がある。

シユさせるものである。



森 もり
邦 くに
夫 お
(町田市ボランティアの会長)

この紫陽花、昨今では庭木として一般に愛好されているが、元来は、海浜の丘陵地帯などに叢生する灌木で、幹が根元から叢生し、その幹先に球状の聚繖花序をつけ、さらに派生したそれぞれの側幹にも、その幹先にそれなりの花序をつけて主幹を中心に集合する、まことに見事な群生灌木なのである。

しかも、この長い雨期を堪えて開花する。この紫陽花はほかの花に較べると比較的花弁も分厚く、しかも堅牢で、その色彩ははじめ

は緑色だが白色に変わり、さらに青紫色に変化するが、その頃がこの花の正開した見ごろの時、花弁も一段と光沢をもち美しさを加えるが、なにかこの花の特徴は、派手なわりには媚る艶色をもたない清楚さが素適で、まことに良い。一つ一つの小さい装飾花が、それぞれ互いに、自らの美しさを保ち、競いながらも乱れることなく自然の法の中で秩序よく共存集合した大きな美のエネルギーを醸し出している。まことに素朴でしかも豪華に、自然の大きな愛の息吹きの中で、生き生きと力いっぱい咲き誇っている。

こんな紫陽花が私はたまらなく好きなのである。

× × ×

この頃は世の中が進みすぎたせいか、なにごとにつけ、どうも「努力」とか「精進」とか実践の伴わない陰のうすい言葉になってしまったような気がする。

自分の小さい能力を過信したり、お座なり

の誤魔化して世間を渡ろうとしたり、自分のことだけしか考えないエゴイスティックな思想が蔓延している情けない世の中だ。

だから、扶けあうことを嫌い、支えあう力の強さを忘れ、真実の人の愛が理解できず、徒らに悩み、苦しみ、自ら混沌の淵に墮ちこんで、失意厭世のはて処世を誤る哀れな人達が沢山いる世の中になってしまったようだが、どうも、これらの手合のことを聞いてみると、驚くことに、人間としての処世の掟みたいなものをまるきり心得えていない。

人間として、社会人としてこの社会で生きてゆくには最低でもこれくらいのこととは知っていなければならないこと、これくらいのこととはどうしてもしなければならないこと、など生きるための一番下の基準があるが、これすら遙かに下廻る人がいるとしたら、生きてゆけるはずがない。

しなければいけない時に、努力をしない、精進をしない、なにも出来ない、なにも知ら

ない人間ができ上ってしまう。

ところが、現実の世の中は決して甘くない。だから行詰る失望と孤独の夜が続いて、いい知れぬ寂寥のはてに尊い生命の灯を自ら消すような破綻に追い込まれる。ここ何年かは、このようなパターンの繰り返しの腑甲斐ない時勢が続いている。

一九七一年度版の『世界健康統計年鑑』の調査によれば、一九六七年から七〇年にかけての世界に於ける日本人の自殺人口は、一般年令層に就いては四位から六位の間と報告されているが、これが十五歳から二十四歳までの若年層に就いてとなると、驚くべし世界一位と、実にかなしい不名誉な報告が出されているのである。

腑甲斐ない世相が数字の上で浮き彫りされている。この現実には放置したら大変である。

× × ×

先達で、講演先で余暇に読んだのだが、一九七五年度に於ける我が国の高校進学率は、

適令生徒の実に九一・五％と超高率に及んでいるそうだ。

この数字はまさに先進文明国家群の中での一級の教育大国と云っても云い過ぎではないように思う。

しかるにどうも、諸学研鑽の聖域であらねばならない、この名誉ある教育界は、今、不信と無秩序、虚構と背信、困惑と不安で覆われ、その暗雲はいつ晴れるとも知れぬ醜状で呻吟している実情である。

そもそも、教育の基本理念、まことの目的とはなにか、その答えは極めて簡単である。教える育て善導することに尽きる。家庭に於ける家庭教育、学校に於ける学校教育、社会に於ける社会教育、それぞれ皆どの過程に於ても高志を養い、秀れた知識を収めることで、教えると云うこと、育てると云うこと、これは人間社会のもつ極めて大切な機能の一つであり、活動の一つである。だから教える者も、教えられる者も、その行為が、必らず「愛」

と「信」の融和の中でありたなければ意義がないし、効果もないのである。

今、ここに私は、私の尊敬する大正時代を代表する宗教文学者であり、人道主義者である倉田百三先生の『師と弟子の純情』の一節を拝借してみよう。

私は先月の末からこの宿に移りました。青い麦と静かな……（中略）……小ぢんまりした、感じのいいところです。一灯園から七、八十ばかり、（西田）天香さんは町へ出るたびに下から倉田さんと声をかけて下さいます。丁度通り路にあたるのです。私は二階から顔を出して晴れやかに親しい挨拶を先生と交わします。私は一灯園では毎朝通ってお経を誦じ礼拝した後で天香さんの次男の理一郎と云う十五になる少年を連れて帰って英語を教えています。この少年は色の白い、美しい、利発な子で、私を信じてすがります。私は、不幸な人々のためにできるだけの

力を分っています……。私は天香さんの一人の弟子として信愛され、その愛憐の仕事を支えることを幸福に感じます。

このごろ、私の心は慈しみと悲しみに濡れています。今日も雨が降るようにこの一灯園を濡らしています……（後略）。

この抜萃に見られるような清純で温かい師弟愛こそ、まことに素晴らしい信仰の世界だと思う。

「愛」も「信仰」もない教育だから、本来の目的が達成されないのだ。

ここ十数年、どう云うことかこの基本的な清純な教育理念が、どの（家庭・学校・社会）教育の場でもうすらいだようだ。教育は基本的にビジネスではないと云う観点に立ち、凡ゆる角度からみでの過程を、さらに、今一度、正しくロジカルに検討し合い、修正しなければ、この世界からの矛盾と撞着は排除されず、覆っている暗雲をふきはらうことも至難になるだろう。

厳しく、そして、もっと温かく、赤い血の通った生きた教育の場をつくって、人道的でヒューマンな、そして思いやりのある、慈愛の心のみちた好青年をたくさん生みだすことに最善の努力を傾けたいと思う。

教えて厳ならざるは 教不厳

父の過ちなり 父之過

中国の古い宋と云う国の高名な儒学者王応麟の『三字経』の中の一句であるが、私は、この金句をさらに読みこんで、

教えて厳ならざるは

師の過ちなり

でもあると思う。切々たる父の慈愛、父子の温情の漲る訓えである。よき時代のよき訓えと云ったら異論が出よう。しかし、一二二〇年代から今日なおこの訓えは生きている。

けだし、人間の社会生活において生命の形而上学がすべての社会科学に先行する限り、温い心の社会生活が営めることは確かであろう。

新刊『共励五十記帖』

○「書道共励会」の創始者林祖洞師とその法嗣で現会長林錦洞師の発会以来五十年に及ぶ作品の鳥瞰図録。書道芸術に心を寄せる方々に、自信をもっておすすめできる新刊豪華本。

B4判 一六〇頁(ケース入り)

表紙 ワインカラー裂地金文字題字

頒価 一〇、〇〇〇円(荷造送料共)

申込先 〒108 東京都港区三田4-4-17

書道共励会

(振替東京 七七四四七)

取扱 法然上人鑽仰会



断念と詩

石原吉郎
いしはらよしろう

(詩人)

(一)

今日の私の話は、「断念」ということと詩(ポエトリ)についてであります。いずれにしても「断念」という発想は、永いさまざまな経緯を通して私なりに辿りついた考え方なので、できるだけ主題に即した形で不十分ではあります。現在の私の考え方をお話したいと思えます。二十年ほど前、私が詩を書きはじめたころ、鮎川信夫から、「一篇の詩を書き終ることは、いわばその

詩を放棄することに等しい」といった意味の言葉を聞いた記憶があります。私はこの言葉を実に新鮮なものとして、違和感とともに受けとったように思います。当時の私にとっては、一篇の詩を書き終ることは自己を表現して完結することだ、という風に理解されました。それから十数年を経て、はじめて私は「断念」という発想に辿りついたわけですが、その時はじめて鮎川氏の「放棄」という言葉が私にとっての「断念」という方向を暗示していたように思えるのでした。私は「断念」ということ

の重大さに、詩を書くことによって辿りついたわけですが、そこへ辿りついたということ以外に、この経路や試行錯誤のことなどをここでお話しすることはできません。

私の詩が発見した時には、「位置」という発想が唐突にあり、その発想が私の詩にとって次第に決定的なものとなったその延長線にこの「断念」ということが浮かび上がってきたのです。私が位置について考えるのは、私自身がそこにいなければならないということ、それは私の人生の体験が背景を形どっています。自分の意志によってこの位置を築いてきたようにも思えますが、実はかろうじて詩を書くことによってその位置を確保してきたにすぎないのです。

このような重苦しい位置から逃れるためには、さまざまな屈折があったわけですが、そこから「断念」という思考が起ったのは、私の人生の一つの折り返し地点ではなかったかと思うのです。ただ私にとっては、私がかつてある位置にいたということは、他の位置を選ぶことを「断念」したということではないかということです。人間が自由に他の位置を選ぶことはできないということ、は、戦争や強制収容所を通じてきた私には今もお痛切

な問題であり、この痛切さが、「断念」という発想を生んだように思えるのです。そうすると、私は「断念」を出発点としていたのではないかということに達するのです。

こうした展開は詩という表現形式によって、はじめて可能だったのではないのでしょうか。つまり散文的な発想では、このような根源的なものは生まれてきません。「断念」ということの裏には、一つの条件へのやり切れなさということが含まれています。そしてそれは、位置という一つの条件から他の条件へと拡大される可能性を無限にはらんでいるのです。

「断念」とは、一つには「逃避」です。また一つには、「告発」ということでもあります。被害者意識から「断念」することが、思想的混迷から自分を自立させることだったのです。「断念」とはきわめて困難な立場であるとともに、ある意味では安易なものです。この二重性を私は重要なことと受けとめています。もしここに一輪の花があるとすれば、この花は花以外であることを「断念」したのです。

花であること

花であることでしか拮抗できない外部というものがなければならぬ

花よ、光り去る重みを花の形のままおし返せ

花であることはもはや一つの宣言である

一つの花でありえぬ日々を越えて

花でしかついにありえぬために

花の周辺は適格に目ざめ

花の輪郭は鋼鉄のようでなければならぬ

(二)

私は、私以外のものであることを「断念」することによって、まぎれもない私として存在しています。その人が、もしその人以外であることを「断念」できないとき、その人はどうすればよいのか。これは多分に「自殺論」へと展開する恐れがありますので、ここでは控えますが、ただ花は自殺しないが、人間は自殺のできる動物であるということ、心に止めておきたいと思います。

私の存在ということへのネガティブなアプローチに、「断念」が存在することの基本的な立場として理解されます。大変詩的な断定ということですが、問題をさらに

飛躍させるならば、私が意識的に「断念」する、または「断念」をさせられたという方が真実に近いかもしれません。その場合には、私たちを「断念」させるものが当然なくてはなりません。それは何か。この場合、私たちは反射的に「神」とか「運命」という言葉を用意されたもののように思い浮べるかもしれませんが、私自身は問題をそこまで遡っても解答はないのではないかと思います。それよりも私たち自身が「断念」の結果として、この世界に存在しているのではないかと考えることが、何かの手掛かりになると思っています。このすべての「断念」の頂点に、詩があるのです。

「断念」という私の考え方が、いわばそれぞれの思想が独断であるのと同じように独断であるとは思いますが、しかしその独断であることによって、あらゆる論駁、反論に耐えることができるのです。ただここで断りするならば、「存在」「断念」という思考は、私自身のいわば体で覚えた思想であります。私はやもなくこの思想に到達したのであって、その有効性とか展開の可能性については、現在の私にはありません。

ここでは私は、「断念」ということに関連すると思わ

れるような一つの詩を引用しておきたいと思います。佐藤美佐子という詩人の『追伸』という詩集の中的一篇です。

無題

石　それでいいのね

今年も去年も一昨年も私は見てしまった

石　そこでもいいのね

かつて詩人の立原道造は、東大の建築科の卒業制作として、やがては廃墟となることを予想した設計をしたというのですが、その話を聞いたときに即座に思ったことは、立原道造は建築家である前にまず詩人であったということです。創造ということの直前に、すでに創造されたものが崩壊しつつ残る、といういわば創造そのものの「断念」としの美学がすでにあったのではないかと思います。このことは、私がアンコール・ワットの遺跡を訪ねたときにも感じたことでした。アンコール・ワットは創造されたモニュメント（記念碑）であることを止めて、日に日に風化しつつある。しかしそのことによっ

て、今もなお変化し動きつつづけているということです。動くものはすべて生命があることで、モニュメントとしての生命を「断念」したことが、なお崩壊しつつづけることによって生きつづけていたということですよ。

(三)

「位置」という重苦しさから、私は「断念」という発想が起ってきたのですが、これらが私の詩的側面を形成したと同時に、詩という場において「断念」という思想もある意味では可能だったわけです。

耳を

海は断念において青い
空は応答において青い
いかなる方軌を経て辿りついた青さにせよ
いわれなき寛容において選ばれた色彩はすでに不用意である

むしろ色彩は
耳を

紺青の淀みとなる深い安堵へは

耳を

色というものは、普通目で感ずることですけれども、海が「断念」において青いことは、海はもう青くある以外の色を「断念」して青くなったということで、そのように空は青くしかありえないということによって青い、というのがこの詩の発想です。

板

私を楯と呼ぶな

すべて防御するものの名で呼ぶな

一枚の板であれそれは祈られてあるのだ

はるかにこの源を遠く

絶滅の跡の渚へ平たくおかれ

祈られて波に洗われつつづけるものだ

この詩をどのような読まれても結構ですが、これを嵯峨信之という詩人は、「人類が絶滅したあとの終末の姿」と読んでいます。私がこの詩を書いた直後の感想は、たとえば硫黄島とかサイパン島とか、あの殲滅戦のあとの

姿ですね。そこには人間はいないだろう。しかし何かの目的のために作られたものは残っている。しかもその板は、もう防衛する目的をもっていないという、こういう意味です。

この日馬は蹄鉄を割る

あるいは蹄鉄が馬を

……〔断念〕より

〔文責編集部〕

今回掲載させていただいた「断念と詩」は、特異な個性と戦争体験の深化から鋭角的なすぐれた現代詩を発表しておられる詩人の石原吉郎さんのお話です。石原さんの戦争体験とは、昭和十四年に二十四歳で応召、敗戦の年にソ連に抑留されました。その後、昭和二十八年の特赦によって許されるまで、永いシベリヤ強制収容所の暮しに耐えてこられました。苛酷な厳しいそうした歳月を踏みしめてこられた石原さんの真摯なお話し振りが、この放送にはよく表われておりました。このお話は、六月三十日(木)から七月二日(土)にかけて放送されたものです。

(特別寄稿)

お念仏と指揮者



お 夫 者
きく 菊 指
とう 藤 (指
さ 佐

もう十五、六年前のことになるだろうか。四年間のウィーンでの音楽留学生活に終止符を打ち、惜別の念を抑えようにも抑えられず、後髪をひかれる思いで、知人、友人と別れの握手を交し、アドリア海に面するイタリアの名港トリエステへと、南ウィーン駅から列車でむかった時は、十一月の初旬で、秋深い街路樹の落葉がカサカサと音を立てて、地面に舞い落ちる季節だった。

アドリア海を南下し、地中海と紅海をナイル経由で結ぶスエズ運河を通過した頃は、十一月の中旬ではあったが、真夏を思わせる暑さで、船客達もいつの間にかすっかり夏姿に変わっていった。

スエズ港をさらに南下し、アラビア半島南端の自由港アデンに寄港した時は、一層暑さが厳しく、炎暑とはこのことかと、じっと忍耐強く汗を拭き拭き過ぎすしか手だてがなかった。

アラビア海に面するバキスタン第一の大都市カラチとインド西海岸第一の港ボンベイに寄港しつつ航行をつづけ、私達を乗せた船は大海インド洋へと進路を順調にとっていた。ボンベイからカルカッタまで海また海の一週間の航海は、実に穏やかだった。エンジンの音と振動の

響きがかすかに船体に伝わってくるだけで、油の上を滑るように進んでいる感じだった。時には全く微動だもせず静止しているかのようにも思われた。それまで海というのは、いつも波を伴っているものとはばかり私は思っていた。鏡のように水平な海面を見たのは、インド洋ではじめてだった。

水平線の彼方から顔を出すだいたい色のギラギラ輝く朝日とともに起床し、海面を二、三十米も飛び交う飛魚の群に元気づけられ、私の船内の一日が始まる。そして



指揮棒をふる筆者

夜の月が風の洋上に銀色の影を映す頃に就寝する。特に船旅の夜の風情は、数々の物思いに誘い、極度の孤独感、絶望感が襲ってくることもある。人間の弱さ、無力さを、もつとも強く知ったのも、船から夜空を眺めた時だった。

船旅の魅力は、なんといっても朝昼晩の豪華な食事にあまる。また船客同士の交際、親睦も大きな収穫といえる。甲板での日光浴の一時、またバーなどで偶然知り合ったエレガントな外国婦人とワインでも飲み交し、おしゃべりのできる機会をうるのも限らないロマンが湧いてくるものだ。シンガポールを過ぎ、ホンコンへ到着する頃は、トリエステ出航以来約一カ月を要した。

いよいよ沖繩沖を通過。私は四年振りに見る日本の姿を船客の誰よりも早く最初にキャッチしようとい心はずませていた。ところが、急に天候が崩れ、風雨が激しくなってきた。台風がやってきたという情報が忽ち船内に流れた。巨大な船体は、猛威をふるう暴風雨と荒れ狂う時に襲われ、木の葉のように揺れ動く。キャビンの窓に物凄い勢いで海水のしぶきと風雨が吹きつけられると、一瞬外は何も見えなくなる。こうなると勿論、立つ

ていることはできない。

船が傾くと、床に坐つて必死に抵抗しようとしても、部屋の間隔へ連れていかれる。食堂の棚と、地下の貯蔵庫に並べられている飲物のビン類が、一度に床にたたきつけられ、割れる轟音に生きた心地がしない。いつも水平線を眺めていたキャンピの窓は、今や左右に揺れる毎に、ある時は空が窓と並行し、ある時は海が窓と並行する。床の荷物もそのたび毎に前後左右に滑り動くのである。私は床に取り付けてある机の足に、しっかりとしてみつくしか方法がなかった。いよいよ場内マイクから「救命具をつけよ!!」という指令が出た。私は遂に覚悟を決めた。その時全く無意識に正座して手を合わせ、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」と祈っていたのである。

私は、留学中、テーマを、宗教音楽、オペラ、シンフォニーを中心にして研究してきた。特に宗教音楽に関しては、毎日曜日の朝、どこかの教会へ出掛けては十字をきって「アーメン」を唱えてお祈りをし、その後ウィーン音楽大学の学生達とミサ曲の演奏をし、日曜、祭日には教会へ出入りしていた。それがきっかけで、ウィー

ン古典合奏団に勧誘され、バロック音楽と宗教音楽の演奏活動を専門とする仕事に従事することになった。

過去において殆ど「南無阿弥陀仏」など唱えたこともないし、私の心からは忘れていたはずなのに、なぜ「南無阿弥陀仏」が口をついて出たのだろうか。私はこの時から、日本人としての意識、日本精神の本質を再認識すると同時に、私の生活を占めていたヨーロッパ精神が遠くへ離れていくような気がした。今考えてみると、これが私の人生観、世界観の一大転換期となった。

嵐が丸一日続いた。翌朝は昨日のことなど忘れたかのように、あまりにも見事な透明な青空だった。波はまだ高かったが、清々しい海の眺めだった。おそらく九州沖にでもさしかかっていたのだろう。段々日本列島が薄ぼんやりと連なって見えはじめてきた。十二月もなかばを過ぎ、日本近海はもうすっかり冬空に覆われていた。銀嶺に輝く富士の麗姿がくっきりと海上に浮かび上がった。感激に涙がとめどなく頬を流れた。無事帰国したのである。寒風の中を甲板に立って、再び、「南無阿弥陀仏」と合掌した。



法然上人の問答から教えを求む

吉村孝
よしむら たかし

このところ法然上人の問答集『十二箇条問答』に縁がありまして読んでおりますが、古文書であるので中々解し難い所が沢山あります。しかし文は法然上人の教え故、何とかして会得したいと存じております。諸先生方の御批判を仰いで正しく受持したいと存じます。

『問、八宗九宗のほかに、浄土宗の名をたつことは、自由にまかせてたつること、余宗の人の申候おは、いかか申候へき。』

答、宗の名をたつことは仏説にはあらず、みつからころさすところの経文につきて、存したる義を学しきわめて、宗義を判する事也。諸宗のならひ、みなかくのことし。いま浄土宗の名をたつる事は、浄土の依正經に

つきて、往生極楽の義をさとりきわめたまへる先達の、宗の名をたてたまえるなり。宗のおこりをしらすもの、さやうの事おは申也。抑浄土一宗の諸宗にこえ、念仏一行の諸行に勝たると云事は、万機を撰する方を云也。理観菩提心読誦大乘真言止観等はいつれも仏法のおろかにましますにはあらず、皆生死済度の法なれども、末代になりぬれば力不^レ及、行人の不法なるによりて機は及はぬ也。時をいへば末法万年の後、人壽十歳に促り、罪をいへば十惡五逆の罪人也。老少男女の輩、一念十念のたくひに至るまで、皆是撰取不捨の願にこもれる也。故に諸宗にこえ、諸行にすぐれたりとは申也とぞ仰られける』

私解

問、仏教に多くの宗派があるのに、更に浄土宗を自由に開宗することは、他宗の人の申すことに對して、いかが申したらよいでしょうか。

答、宗の名を以て開宗することは仏の説法（仏教經典）にはないことで、自ら志すところの經典に基づいて、持っている道理を更に学び極めて、それによって宗の教義を判断するのである。他の宗派ができたのも皆このような方法である。今、浄土宗を開宗することは、浄土宗を依り拠としてゐる正しい經典（無量壽經、阿彌陀經、觀無量壽經の浄土三部經）について、極楽浄土へ往生できる根本義を悟り究められた善導大師が浄土宗の名をお立てになったのである。浄土宗の起りを知らない者がそのようなことを申すのである。

浄土一宗の教義が他の宗派を超越し、又、南無阿彌陀仏の称名念仏の修行が他の多くの修行に勝れているということは、あらゆる性格の人を救い取ること（仏の道へ入れること）をいうのである。

理觀菩提心誦大乘真言止觀等（浄土三部經以外の仏教教典）は、何れもそれらの經典が愚かであるというわけ

ではなく、皆仏法の根本義である因縁の真理に基づき六根（眼耳鼻舌身意）の対象である色声香味触法（常に変化して実体がないもの）から離れて浄土にわたる教えであるが、末代（釈尊滅後永い年を経た現代のこと）ともなると、それらの難解の經典を解読する力が乏しくなり、修行する人も教えの通りには中々行えなくなり（經典には教えの如く行なえとある）、従つて仏道に入る力が及ばないのである。これを年代で考えてみれば、一万年の後には人の壽命は十歳位になり、又罪についていえば、十惡五逆というような惡徳の者ばかりになってしまうのである。

しかしこれらの十惡五逆の惡徳の人々でも念仏修行の道に入れば、老若男女の者共が、たとい仏名を一念又は十念称えただけでも、皆これらの者を救い取つて捨てるようなことはない和阿彌陀仏の願の中に含まれているのである。それ故に浄土宗は他の宗派を越え、その修行は他宗の行より勝れているといえるのである。

『問、ふるき堂塔を修理して候はんをは、供養し候へきか。』

答、かならず供養すへしという事も候はす、又供養し

て候はんも、あしき事にも候はす、功德にて候へは、又供養せねはとてつみのえあしき事にては候はす』

私解

問、古い堂や塔を修理することは、供養になるでしうか。

答、必ず供養すべきということでもなく、又供養して悪いという事でもなく、何れも功德に係ることであるから、供養しないからといって罪を得る悪い事ではない。

『問、法華真言おは、雑行に在るへからすと、ある人申候おはいかむ。』

答、恵心の先徳、一代の聖教の要文をあつめて往生要集をつくりたまへる中に、十門をたてて、第九に往生の諸門の中に、法華真言等の諸大乘をいれたまへり。諸行と雑行と、ことははことに、ここはおなし。いまの難者は専心の先徳にまさるへからざるなり』

私解

問、法華や真言の修行は雑行に入れてはいけなないと、

ある人が云っていますがそれはどうでしょう。

答、恵心の先徳（平安中期の天台宗の高僧で恵心僧都のこと）が、一代の聖教（釈迦仏教の經典）から重要な文を集めて、往生要集（仏の悟りの境地即ち極楽浄土へ生まれて往くために必要な經文を集めた書）を書いた中に、十種の教えをはつきり示して、その第九番にある往生を説いた教えの中に、法華や真言等の大乘が入れられてある。諸行と雑行との関係は、その言葉は異なっているけれども、その心は同じである。いまの難者（法華真言が雑行か正行か判らなかつた人）は決して恵心僧都に勝るべきものではない、つまり劣っているということである。

『問、余仏余經につきて、善根を修せむ人に、結縁助成し候ことは、雑行にてや候へき。』

答、我こころ弥陀仏の本願に乘し、決定往生の信をとるうえには、他の善根に結縁し助成せむ事、またく雑行となるへからず。わか往生の助業となるへき也。他の善根を随喜讃嘆せよと積したまへるをもて、こころうへきなり』

私解

問、余仏余經（阿彌陀仏以外の諸仏や、淨土三部經以外の經典）について、善根（善い報いを生み出す原因としての善行）を修めている人に、縁を結んで助成してあげることは、やはり難行でしょうか。

答、自分の心が阿彌陀仏の本願に救われて、必ず極楽往生ができると思ふことができていれば、他の善根に縁を結んで助成しても、それは全く難行となるべきものではない。それは、わが淨土宗で説く往生の助けになる行ないとなるべきものである。釈尊は他の善根を行ずる人には喜んで随い、その人を讃美せよと説明されているのでこれは心得べきことであると、法然上人は教えられている。

『問、極楽に九品の差別の候事は、阿彌陀仏のかまへたまへる事にて候やらむ。』

答、極楽の九品は弥陀の本願にあらず、四十八願の中になし、これは釈尊の巧言なり。善人悪人一処にむまるといはは、惡業のものとも、慢心をおこすへきかゆへに、品位差別をあわせて、善人は上品にすすみ、惡人は

下品にくたるなりと、ときたまふなり。いそきまかりてしるへし』

私解

問、極楽に九種類の差別（觀無量壽經にある）があるのは、阿彌陀仏が何かのために定めたことでしょうか。

答、極楽の九品は阿彌陀仏の本願ではない。四十八願の中にはない、これは釈尊の上手な導びきである。（下品の下から始まり中品を経て上品の上まで時間をかけて導く釈尊の非常に巧みな導きといえる）。善人も惡人も称名念仏によって同じ処に往くことができるとしたら、惡徳の人は必ず漫心（自分を立派だと思つて傲慢する心）が起きてくる故に、品位の差別をつけて、善人（心の淨らかな人）は上品に進むことができるし、惡人（自分のことしか考えない人）はいくら念仏しても下品の下の方へ降りてしまうものであると、説いたものである。念仏者は心を正しくして急いで上品の上まで往つてみるべきであると法然上人は九品の真意を説いてくださったのである。

教えは簡単であるが、この九品の説明は觀無量壽經にも詳しく説かれており、念仏者は法然上人の教えに随つ

て修行し、自分は今どの辺まで昇ることができたかを知
ることは決して無益ではないと思われる。説明の最後に
「急ぎ行きて知るべし」とあるのはそのためであろう。
途中で横道に外れないように深く心に留めて修行したい
ものである。

『問、普賢經に、ほとけの母を念すへしと候は。

答、いさおほへす』

私解

問、法華經の最後の普賢經に仏の母（仏教大乘經典のこ
と）を念すべしとありますがそれはどういうことでは
うか。

答、そのような事は覚えていないと法然上人はいわれ
た。仏の母の理由を知っても、唯、心からの念仏の妨げ
になるので覚えていないと云ったものと思われる。

○吉村さんは、熱心な浄土の信者です。法然上人の文章を
みずからの心の中で真摯に理解し、その求道心に導かれて本
誌に寄稿されました。

○ご案内

暑中いよいよ厳しき折、皆様いかがお過ごしでしょう
か。

さて本誌でも、諸方面より要請もありまして、“浄土
俳壇”のコーナーを設けることになりました。選者には、
ホトトギス同人の一田牛畝先生（福岡市正定寺住職）
をお迎えして、誌面の一層の充実をはかりたいと思ひ
ます。

皆様からのふるってのご投句をお待ちします。

◇要項

一、ハガキ一葉に一句づつお書き下さい
一、投稿先――

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人 鑽仰会 宛

想

随

心のままに〔七〕

川内知光

日本は良い国だ (一)

仏教タイムス社主催の「インドネシア、ボロブドール仏蹟参拝団」に参加すべく勧誘をうけました。電話ですが、私は歩行が三百メートルかせいぜい五百メートルほどしか歩けないと申しましたが、龍を雇うとか、最悪の場合「私がおんぶするとか何とかいたしますから」というので、私共夫妻は参加いたしました。が、まづ家内がバスから降りる際に落ちましてねんざをしましたのです。早速、添乗員の人が飛行機の乗り降り等はおんぶして頂いたので。家内は重量が私の半分位しかありませんから、添乗員の人は私よりは楽をしたのです。

バリ島の飛行場で体調がおかしいので医

師の診断をうけたのですが、医師は、「あなたは飛行機に乗ってはいけません……。しかし次のシンガポールは文明国だから紹介状を書くから、すぐに診て貰いなさい」といわれるのです。診察をうけて大便秘所に行きました。が、真つ黒な便が多量に出たのです。医師はこの便の状態は診ていないのが、恐らく血圧ものすごく減っていたのでしょう。飛行機が上昇すると同時に、私は白眼をむいて、両手を前に出してブルブルふるえが出ました。臨席の家内は、「危い！ 危い！」の声もものは、ベルトをはずして添乗員の人の所に行ったのです。折良く、フランスの医師が乗っていました。「私は観光に来たので用具は持っていないが、診てあげましょう」ということで、快

く診察して下さいました。そして酸素吸入をして、頭を冷やして漸くシンガポールに到着いたしました。

シンガポール飛行場に到着して、救急車を呼ぼうとしましたが、日本人には日本の大使館の証明がいるそうです。大使館に電話をしましたが、退庁後係りの者がいないというので、タクシーにて病院に運ばれたのです。ところが医師が「グッドモーニング」といって、病室に入って来ましたのが、翌朝の九時半です。仮りに、昨夕六時に入ったとして、十五時間経過しているのです。そしてレントゲン写真を撮ってそれでおしまいでした。翌朝、血液の検査、そして次の日には輸血です。シンガポールは人口の四分の三は中国人です。それで私は中国人かフィリピン人か、いずれかの混血になったのです。

私達の旅行は千代田トラベルの扱いだったのです。社長の織内七郎さんとは、インド日本寺建設事業のことにて交友があります。ガイドさんが帰国して私の入院の事を話したのでしょう。そして織内さんは、シ

ンガポールにて日本人旅行客の取扱いをしている、日本旅行公社社長夫人柳和子さんに電話して下さったのでしょうか。柳夫妻がまづお見舞いに来て下さいました。そして毎日柳さんが来て下さるか、社員の方が見舞いに来て下さるかして、タバコを買いに行つて貰つたり、今愛用している象牙のパイプ、本紙に以前に書きましたが私は一日に百頁以上読む永年の習慣があるのですが、単行本はないが週刊紙はあるというので、主な週刊紙を五、六部ほど三週間読まして頂いて日本の実力の偉大いなことに驚いたのです。

織内さんから連絡があったのでしょうか。

「病院の支払いは今頂かなくても、私の方で立て替えておきますからご心配なく養生して下さい」と有難い言葉です。友情は有難いことです。

帰国してから、柳さんから明細をつけた請求書が来ましたが三十余万円でした。家内はドルは必要ないと思つて全部出したようですから、合計で六十万円近い支払いになったのです。

まだ話は続きます。帰国してからタクシにて医院に通院していたのですが、私はまた家にて倒れたのです。そして、救急車を呼んで、病院に入院することになったのですが、救急車がY病院の玄関に横づけになった時、白いガウンを着た医師先生と看護婦さんが寝台車を持って待っていて下さつて、直ちにレントゲン写真、血液検査、輸血とシンガポールにては三日程要したのが一時間足らずで処置済みとなりました。手術を要する決意はしていなかったのですが、翌晩真つ赤な血を吐いたのです。家内に何回も心配をかけて申し訳ないと思つて、胃の三分の二を切つて捨てました。手術室に入る時、若夫婦が不安の趣にて立っていました。「頼んだよ」「お婆ちゃんのこととお寺のこと頼んだよ」……。私の臨終の際においても、同じようなことをいうのではないかと思つています。お金のことをいうのは私は好ましくないのですが、ここでは『浄土』誌に書くために申しあげるのです。実は手術料は三十万円位費るのでないかと思つたのですが、と

ころがいよいよ退院日が来て、妻が支払いに行きましたが、入院費は老人のため一切不要個、室代一日千五百円を支払ただけです。不思議に両方共十八日間入院しましたのにこれだけの差があるのです。かくして、日本は結構な国だといふのです。

日本は良い国だ (二)

これもまた、インドネシアに行った時の話です。日本が進駐していた時、私のガイドのインドネシア人が、何とかいう日本の中尉の人に、よく遊んで貰つたらいいのです。「国の為には命を捨てよ」といふのです。そのために、オランダを追払つて独立国になったのです（実際は日本が追払つたのです）。大統領官邸は、元日本の司令長官邸だったのですが、塀もなく二尺位の鉄棒が立つて、錠が一筋渡してあるだけです。邸内に鳩が遊んでいるのもよく見えるのです。大変治安の良い国だと思つたのです。ところが田中角栄総理大臣が訪問した時、大変な反撃をうけたと聞いて、その警備体制に私は訳が分らなくなつてしまいました。

法華經のサンスクリット名は、『サッダ
ルマ・ブンダリーカ・スートラ』であり、
「白蓮華に喩えられる正しい教えの經典」
の意味である。

法華經のサンスクリット語写本が、ネパ
ールやカシミール、中央アジアなどから発
見されており、断片も含めれば、かなりの
数のにのぼり、最も多くのサンスクリット語
写本の現存する經典の一つであらう。

（お）（經）（の）（べ）（い）（じ）

法華

經

また、漢訳は、部分訳をも含めれば、た
びたびなされたようであるが、現存するの
は、三本である。その中、日本で一般に用
いられているものは、鳩摩羅什訳『妙法蓮
華經』である。

竜樹の著作と伝えられている大智度論に
法華經が盛んに引用されていることや、世
親に法華經に対する註釈書があることや、
サンスクリット語写本が各地から発見され

ていることなどから、インドにおける法華
經の流布の仕方が知られよう。

また、中国でも、天台宗を開いた智顗の
法華經解釈によって、この經は大いに流布
した。中でも、観世音菩薩の功德を説く、
観世音菩薩普門品は、観音經として独立し
て珍重され、観音信仰の流行を促した。ま
た、薬王菩薩の往時の苦行と法華經に対す
る姿勢を説く、薬王菩薩本事品により、捨

身供養者が続出したこともある。
日本でも、法華經は最も馴染みの深い經
典の一つであり、法華經といえは、日蓮宗
の専売特許のように思われがちであるが、
天台宗で最も重要視する經典である。

法華經の重大な思想の一つは、唯一乘
思想である。如来のさとりとその内容は甚
深であり、一般の人々には理解しにくい
ため、対機說法・方便として、声聞・独覺・

菩薩の三乗思想をまず説いたのであるが、
如来の真意は仏一乘であると主張する。

また、歴史上の仏陀は、人々を救済す
るために仮りに現われた、方便としての仏で
あり、本仏は、遠い昔に仏となられ、永遠
の寿命を持ち、常に靈鷲山において說法さ
れている。さらに、我々の住むこの世界も
実は淨土であると主張する。

この本仏思想は、親鸞が「久遠実成、南
無阿彌陀仏」と説いたように、阿彌陀仏同
様、釈尊の報身を説いたものと理解すべき
であらう。

また、法華經には、殊更に法華經自身を
価値づけようとする意図が見られる。すな
わち、法華經の中の一句でも受持し、説誦
し、解説し、書写する者が、いかに大きな
功德を得ることができかを説き、一方、
法華經と法華經誦誦者を誹謗する者があら
ば、その罪は大変重いことも説く。

このことから、この經典の成立、発展時
において、法華經の原型に対する特殊な信
仰形態を持ったグループが存在したのでは
ないかとみる学者もいる。

（Ｔ）



念佛ひじり三国志

(四)

―法然をゆく人々―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

関白邸で兼実卿に説いた内容を精細に法然は語り聞かせている。夜も更けようとする東山大谷の中ノ房であった。

法然の話に耳を傾けるもう一人の男。彼の姿はこの室内にはない。床下の暗がりじつとしゃがみこんでいた。

なぜそんな場所で、そんな恰好をしているのか。

男の目的は法然の説法を聞くためではなかった。みんなが寝静まるのを待っていたのである。

近ごろ善男善女が群集する法然の禪房。さぞかしおびただしい金品が寄進されるだろう、と男は踏んだ。彼はプロの盗賊なのだった。

現に当時の洛中には金品集めだけを目的とした陰陽師や祈祷師、説教師が多かった。民衆は財産の大半を注ぎこんでも「救われる道」を求めている。

男が法然の禪房を同類と考えたのも当然であろう。金品の見返りがなくて、なんで説法などするものか。

聞法者たちが散ってしまい、経営の幹部らしい者たちが一室に集った。今日の収獲でも計算を始めるのだろう、と男は耳をとがらせた。

この男の名は河内の天野四郎。通称は耳四郎だった。拔群に感度の鋭い耳を持っていたからである。

数年前のある日、耳四郎は吉田神社の境内にいた。草むらに仰向いて昼寝をむさぼっていたのである。夜をとおして働かねばならない。睡眠はこうした場所で、この時間にとるのが習慣だった。

寝ついた当座、高かった太陽もだいぶ西へ傾いた。熟睡からさめた耳に、葉ずれをかき分けるようにして話しかけられた。声がつたわってくる。男女の睦言だ。

身をおこして周囲を見まわしたが、その姿はとらえられない。いずれ近くの草むらのなかで楽しんでいるのだろう。言葉だけがはつきりと聞きとれる。

「ああ、もっとゆっくり逢いたい。どうして妾たちは……」

「わしだって思いは同じだ」

なさぬ仲であることは歴然だ。

声は、男の方がだいぶ若い。

とすると、女は人妻か。年下の情夫と乳くり合っているのである。

「あなたさえ踏んぎりをつければ……」

前号のあらすじ

文治五年八月、法然上人の禅室がある東山の太谷を訪れた俊乗房重源。法然上人は請われて関白九条兼実邸に出向いていた。そこは、重源が鎌倉に向う前とは違って、開法の人々も増え、房舎も増築され下ノ房・中ノ房・上ノ房と三つの房舎を数えるようになっていた。これは開法の人々の数もさることながら、法然上人の弟子となる人が急増したためでもあった。多くの開法者を前にして、やや昂かぶった調子で説法している安楽房蓮西もその一人である。安楽房、ひじりとなる前の名を中原師広と言ひ、大外記中原師茂の孫にあたり、父師秀は少納言であった。法然門下に入るきっかけとなったのは鎌倉での住蓮との出会いであった。出自正しい中原師広が一介の念仏ひじりとなったのは、時勢の変革を敏感に察知し明日の仏法、明日の日本をになうて行くのは法然上人の念仏門以外にはない、との確信を抱くに至ったことによる。

関白邸から戻った法然上人に、安楽は兼実とのやりとりの内容をたずねた。それは、悪處非道の罪人が願った往生と、日課七万返の法然上人の往生も、寸分の違いのない同じ往生である、というものであった。この話に驚天動地にも似た衝撃を受けた人物が房の外にいた。

「しかし人を殺（あ）やめるのは許されぬことだ」

「でも、うちの人は妾を砂金で買ったのよ。悪人だわ。

悪人を殺やめて、何が悪いの」

「悪人でもわたしにはご主人。一分の恩はある」

どうやら女の夫は奥州砂金の仲買いを手広く商なっているらしく、男はその使用人である。

「明日は近江まで迎えにゆくのでしょ」

「うむ」

「ひと思いにその場で」

「恐ろしいことを言うな」

「奥州からの荷を奪えば、それで二人が一生暮してゆけるだけの……ねえ、踏んぎりをつけてよ。こんなに楽しんでいられることを……」

女は身体で男の決断をうながしている。男はその誘惑に負けそうである。

やがて、男女は草むらから立った。耳四郎の場所から数十メートルも離れていた。神社の社殿の方へ歩き出した。耳四郎はあとをつけた。二人は社殿の前で左右へ別れる。

追跡をどちらにしようか。耳四郎は一瞬迷った。女に、きめた。年のころ、三十に近い肉感的な女だった。

河原町へきた。その一角に小邸宅がある。砂金商人は女を此処に囲っているとみえる。若い男は店の方で起居

しているのだろう。

耳四郎は小邸宅の床下へもぐりこんだ。女がその実母と二人暮しであることが、じきにわかった。

床下で夜更けを待った耳四郎は、女の寢室を確認し、抜け出すとその板敷をコツコツと叩いた。

寢息が止まり、女が起きてきた。

「わしだ」

声を殺した。

「ああ、時ノ介」

若者の名前は時ノ介らしい。

「決心した。明日のことを打合せたい」

「決心してくれたの。今すぐそこへゆくわ」

実母の様子をうかがっているのだろう。しばらく間をおいて、女はしどけない夜着姿で戸外へ忍び出てきた。

耳四郎はその身体を抱きすくめた。苔の匂いが強い庭先へ押し倒した。

男を迎え入れかけた女は、アッと叫んだ。

「誰、あんた。時ノ介じゃない」

「黙っておれ」

口に手の平をかぶせると、耳四郎は先ず情事を片づけ

ることにした。肉体はすべての理性を麻痺させてしまうからである。

抵抗していた女の力が次第に弱まってきた。いつか相手を選ばぬ女の獸性がむき出しになった。

「昼間の計画だが、お前の亭主をどこで襲うのだ」

「……」

「時ノ介はどこまで迎えにゆくのだ」

「山科」

「山科か……俺が見たところ、時ノ介一人ではこの仕事はむずかしい。あんなヤサ男に何が出来る」

「あなたはどこでこの計画を知ったの」

すでに女は耳四郎の首に腕を巻きつけていた。性の余燼のなかで心まで許そうとしている。

「どこでだってよからう。わたしは何でも判るのだ。山科はどういうことになっている?」

女はすらすらと吐いた。

奥州で砂金を買付けた亭主は、馬三頭にそれを積載して山科まで帰ってくる。そこで店の者が出迎え、奥州から来た従者を帰すのが、いつもの運搬方法だという。「あなたが言うように、時ノ介ひとりでは心もとな

いの。うちの人は力が強いから」

「わしが手助けしてやる。そのかわり荷の半分はわしに寄越せ」

「半分も……」

「あたり前だ。いいか、よく聞け。亭主が山科で殺されたら、お前らはお上に訴えて賊に襲われたと言えは済む。手を汚さずに砂金の半分を手に入れられるんだ。あとは大手を振って夫婦暮らしが出来るではないか。わしの人相なぞを語れば、お上はちゃんと知ってござる。わしは天下でも有名な盗賊だからだ」

「お名前は何?」

「あとで判るさ」

耳四郎は女の身体から離れた。さらに明日の詳細な打合せを開始した。

共犯者になりきった女は、耳四郎の肩に首をもたれて、眼を輝かして謀計に参画した。

悪党は俺一人だけじゃないんだぞ。

耳四郎は何ものかに向って怒号しなかった。

山科街道で雨が降りしきっていた。

天野耳四郎は、街道添いの林中に立った。かたわらで河原町の女がしゃがんでいる。すでに筋書は出来あがっていた。

峠の中腹で時ノ介が待っている。女の亭主と落ち合うと、奥州から従者を帰し、主従は馬を引いて此方へやってくる。この頂上へさしかかったところで一挙に襲撃するのだ。

単独では自信のない情夫に、女は有力な助っ人が現れたからと今朝時ノ介を説得したのである。

雨の街道は人馬の往還も稀だった。それでも幼な子を二人連れた夫婦が耳四郎たちの眼下の道を京の方へ去っていった。

彼らの眼から遠ざかるためか。峠の中腹で主人を迎えた時ノ介は何か立ち話をしている。時間稼ぎをしているのだ。

若いのに、かなり周当な男だ、と耳四郎は思った。

奥州からの従者はとくに帰しており、主従は馬を引いて此方へやってくればいいのだ。

「妾らが待ち伏せしていることを告げ口してるんじゃないあ

ないかしら」

林の草むらにしゃがんだ女は狩衣をあげて耳四郎に声をかけた。

俺と時ノ介と、身体を比較しやがったかな、と耳四郎は考えた。女の瞳のなかで、もたれかかるような情感がゆれ動いていたからだ。

「そんなことはあるまい」

「でも、いやに話しこんでる」

「なあに二人を相手にしたって、わしは平気だ」

耳四郎は山刀を撫でた。

「大丈夫……」

女は頼もしげに微笑んでいる。根っからの悪女だ。

ようやく街道の下で馬が動き出した。砂金仲買いの主従はめいめいが手綱を握り、此方へ登ってくる。女が言うとおり、亭主は肌の浅黒い筋骨逞ましい男だった。手ごわい相手であろう。

少しやり過ごした。

すーっと林を出た耳四郎は、亭主が引く黒鹿毛の背後に取りついた。山刀の柄で馬の尻をしたたか打った。

いななきをあげ、前脚で立ち上がる黒鹿毛。亭主はあ

＜雨の山科街道＞



わてて手綱に取りすがった。その隙に山刀をふりかざして耳四郎は襲いかかった。

意外に脆かった。

肩先を斬りつけられ、太刀を抜くひまもなく、亭主の幅広い胸に耳四郎の山刀が突きとおされた。血しぶきが水溜りに飛び散り、男の巨体がそこへうっ伏せになった。

このあとを敏速にやっつのけねばならない。一頭の馬の背から砂金の袋をおろすと、亭主の死体を縛りつけた。尻を山刀で叩いて、馬を近江路の方へ追いかえた。黒鹿毛はちょっと走ったが、あとはのろのろと雨の街道を遠ざかっていった。

二頭の馬の砂金袋の半分を、さっきの分と合せて、すでに掘ってある林の奥の穴へ投げこんだ。これは女と時ノ介の取り分だった。土をかけ、ためておいた落葉をかぶせた。

「さて、お前さんの番だ」

耳四郎は時ノ介に言った。

筋書は出来ていた。

時ノ介を林の喬木に縛りつけることだ。つまり多勢の賊に襲われた時ノ介主従は、主人が殺され、時ノ介は縛

され砂金はすべて奪われたということになるのである。

女はいったん店へ引きかえし、あらためて店の者を連れて、到着が遅延した主従を探がしにくればいい。発見は女でも、また通行人でもよかった。

「じゃあな、元気でやれよ」

耳四郎は荷の軽くなった馬へ近ずいた。これに乗って、残りの栗毛をひいて逐電すれば仕事は完成だった。取り分の砂金がそこにある。

だが、このとき女がもう一頭の栗毛へ駆け寄った。妙なことを口走った。

「妾、馬に乗れるの」

「馬に……」

「一緒にゆきましょ」

「お前……時ノ介は？」

女は情夫をふり向こうともしない。

耳四郎の脳裏で単純な方程式が組み立てられる。時ノ介を林に残して女と逐電したら筋書の読みがすべてバレル。とあれば時ノ介を生かしておくわけにはゆかぬではないか。すでに馬上へまたがった女の姿勢は第二の殺人を強要していた。

この悪女奴！

耳四郎は縛された時ノ介へ歩み寄った。

「だましたな、だましたな」

表情を引きつらせて絶叫する若者。

「わしはこんなことを思ってもみなかったんだ」

一言弁解しておかずにはおれなかった。

横殴りに山刀を振った。鈍い斬れ方で時ノ介の首へ刀先がめりこんだ。筒先からほどばしる水のように、血が噴いた。

まだ生きている。

耳四郎は雨に濡れた熊笹で山刀をぬぐうともう一太刀、とどめを刺した。すでに先を走る馬上の女を追った。あの砂金を奪われては何にもならない。

「どこへゆくつもりだ」

「あなたと一緒に、どこまでも」

「悪い奴だ」

「悪いんですって……あなたにとって、悪いはずはないわ」

「……」

「なぜなら、あなたが時ノ介を縛っているとき、じつは

うしろからこれをあなたの背中へ突きとおす手はずだったのよ」

と、女は狩衣の下で短剣を示した。

「時ノ介と打合せがしてあったんだな」

「そうよ」

「なぜ、やらなかったんだ」

「なぜかしら」

女は雨で濡れた顔を、にっとほころばせた。栗毛を寄せてきた。耳四郎の首へ手を伸ばした。

「時ノ介よりあなたの方が……」

耳四郎は雨とも唾ともわからぬ液でびっしょり濡れた女の唇を吸ってやった。

「遠くへ帰るんだぞ」

「どこへ」

「河内だ」

「いいわ。何処へでも」

「京のおふくろはどうするの？」

「どうにか一人で生きてゆくでしょう」

事件の発端から山科街道に人影は殆んど見あたらなかった。さっきの親子連れだけだ。

その親子連れを、栗田口のあたりで追い抜いた。

「馬でゆきたい」

と、幼な子が父親にせがんでいる。

「めっそうもない。馬などは貴人でなければ駄目じゃ」

親は言い聞かせる。

黒鹿毛にまたがる狩衣姿の女人を、どこかの身分高い人を思いこんでいる。盗賊と、その新たな情婦だと誰が考えるであろうか。

三

いま東山、法然禪室の中ノ房の床下で天野耳四郎は強烈な衝撃を感じている。

処刑台へ歩む盗賊——それは近い日の自分の姿でもあるわけだが、その盗賊がと見える念仏も、法然ご房がと見える念仏も同じだ。と頭上で法然は語っている。

そんな理屈があるもんか、と耳四郎は強く否定したい。

だいいち悪の世界がどんなものか、知っているのか。耳四郎の脳裏をよぎってゆくのは、あの真々奈という女との河内での暮しであった。

無事に砂金を河内へ運びこたんだ二人は、当座は酒と肉慾にひたりきった。この世にこんな天国極楽が実在するか、と目をみはりたくなる生活だった。

だが、河内などの片田舎では砂金を処分するとき、都からやってきた仲買人に安く叩かれる。下手にさからうと出所に疑惑の眼を向けられるので、それに甘んじなければならぬのである。

手持ちの砂金がみるみる減っていった。

「なあになくなったら、山科へ行って、掘り出してくればいいんだ」

と耳四郎は高をくくっている。あの林中に未だ半分が埋藏されているのだ。

「早く取って来ない」と

「いいや。下手に近づかぬがいい。検非違使の奴らがあの付近を見張っているはずだ」

専門家の知識で耳四郎は慎重を期している。

真々奈はやはり前途が不安らしかった。

この半年間。耳四郎は河内の家から一步も出ようとはしない。朝から酒を喰らい、女の身体を抱いて暮らした。ただし酒は飽きないが女の方はだいたいとうましくなっ

てきた。

その午後も耳四郎は酒に酔って寝こんでいた。目がさめて、咽喉に渴きをおぼえた。土間に降り立ち、瓶の水をひしゃくですくって立て続けに二杯飲んだ。

ひしゃくを戻そうとして耳四郎の耳が俄かに緊張した。アンテナが男女の声をとらえたのである。

耳四郎の家は大きな蓮の池に面して建っていた。男女の声は、どうやらその池の対岸から流れてくる。

女は間違いなく真々奈であった。男の声にも聞きおぼえがある。耳四郎は戸外へ出ると、池や岸辺、蓮のなかへもぐりこんで身を横たえた。そこでとぐるを巻いていた蛇が、びっくりして池の水面へ泳ぎ逃げていった。ここだと対岸の声がいつそう鮮明に聞き取れる。

男は砂金を、酒やその他の必需品と交換にくる片目の仲買人であった。声の調子から真々奈はその仲買人と情交を楽しんでいる様子だ。好色な彼女は近ごろとうんじて近づかない耳四郎に不満をいだいているらしい。

「もつとまとまった砂金がかくしてあるのよ」

例によって色と慾とのふた股道へ男を誘いこもうとする真々奈の魂胆だ。

＜仁和寺門前の茶屋＞



「どこに？」

「それは今言えないけど」

「この近所かね」

「いいえ、都の方よ」

「都に近ければ、また量がまともれば良い取引になる」

「良い取引って」

「茶だ」

「お茶……」

「唐からはいつてくる茶をだ、まとめて買うんだ、その砂金で」

片目の仲買人は新商売の夢を語っている。

「お茶を沢山買ってどうするんだ」

「茶屋をひらく。今、都でいちばん儲かるのが茶屋なんだ」

出たら目な話ではなかった。

中国から輸入された緑茶が、このころになってようやく大衆がたしなむようになった。茶畑も少しずつ出来てきた。ただし、まだ家庭で常用するほど廉価ではなかった。人々は茶屋へ出かけ、そこで長い時間かけてゆっくりたしなむのであった。茶店は現在で言う喫茶であろう。

御室の仁和寺の門前にはこの茶屋が立ち並び、若い給仕女まで置いて、ことに桜の季節には押すな押すな盛況であった。後年になると、酒まで出すようになって、女と歌舞も添えられて、「茶屋」の原型を作った。

仲買人はこの新しい商売の茶屋を真々奈ともどもに経営しようというのである。

「あなた。本気でそんなことを考えているの」

「本気だとも本気ということは、一生妾を……」

「ああ、俺はおかみさんのことが片時も忘れられない」

「あんたのおかみさんや子供はどうするのよ」

「あんな者はどうなったってかまわない」

「家を捨てられると言うのね」

「捨てるとも」

「うれしい。妾だっていつまでもあんな泥棒と暮す気はないわ」

畜生ッ、と耳四郎は土を掴んで池へ投げこんだ。泥棒とは何だ。

「おかみさん。いつときも早くそのかくした砂金を手に入れることだ」

「そうね。いつ逃げようか」

「俺はこれから浪速へ帰る。明日の晩だ。おかみさん、天満まで出てきてくれ。あそこの渡しで落ち合おう」

「それから？」

「淀を船でのぼればいい」

「船のなかで一夜を明かすのね」

「そうだ、船の気分も悪くはないぜ」

「お酒を飲んで、こうやって抱いてもらって」

「あくる日は都だ。その砂金を掘り出すんだ」

「うちの人、やっかみが強いから出にくいわ」

「なあに簡単だよ」

「どう簡単なの」

「おかみさん、これをだな、今夜酒のなかへ混ぜるといい」

「なあにこの袋……」

「唐から渡来したしびれ薬だ。これを飲むとな、明日一杯、身動きが出来なくなる。全身がしびれてな」

「待ってよ、この薬、妾にも飲ませたでしょう」

「フフフ。ちょっぴりな」

「あのとき、あんたに付合って一寸お酒を飲んだら身体がおかしくなって、あんたのするままになっちゃった

わ。何という薬なの」

「阿片と言うんだそうだ」

「アヘン……」

阿片がこの当時日本へ伝来したかどうか、疑問である。ただその名称ぐらいいはつたわっていたようである。

また阿片を酒に混入する使用法も不可解である。別種の薬草であろう。

それにしても真々奈は、同棲半年を越えたのにいまだに耳四郎が特殊な聴覚をそなえていることに気づいていないようだった。

企らみのすべてを聞きとった耳四郎は煮えくりかえる思いだった。蓮の葉がくれから飛び出していつて二人を八つ裂きにしたかった。だが、わずかに耐らえて姦夫姦婦への対策を冷静に考えることにした。

その晩、真々奈は全身に媚びでくるんで耳四郎に酒をすすめた。当然例の薬草を混じた酒だ。土器から飲み干すふりをして耳四郎はすべてを胸へ流しこんだ。

「今夜の酒はいやに効く。眠たくてたまらない」

「あなた、疲れているのよ」

「そうかなあ……おい、もう寝るぞ。口がしびれてきた」

「それはいけないわねえ」

「ああ、もう駄目だ」

耳四郎は身を横たえようと、手足をケイレンさせたりした。眼は合わせていないが、そんな夫をじっと見つめている真々奈――

悪女の姿。この凄まじい世界を善良なる人々は知っているであろうか。

耳四郎が動かなくなると、真々奈は隣室へそとと去った。旅支度にかかったにちがいない。

夜びで歩いて浪速へ出るつもりなのだろうか。

途中で山犬にでも喰われてしまえ、と耳四郎は呪いをかけたかった。

「真々奈、真々奈」

「あなた、どうかして」

「苦しい」

女はほんの形ばかり耳四郎の背中をさすった。

「我慢なさい。妾も疲れたわ。やすませてもらいますからね」

寝間へ戻ると見せかけて、闇の戸外へしのび出てゆく真々奈であった。
(つづく)

舞 見 お 中 暑

〒170 東京都豊島区西巢鴨三―二〇―一 大正大学 電話(〇三)九一八―七三一―代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六 佛教大学 電話(〇七五)四九一―二二四―代表	淑徳短期大学 学長 長谷川良昭 東京都板橋区前野町五―三―一七	鎮西高等学校 校長 真和中・高等学校 校長 上田祐規 熊本市九品寺三―一―一
埼玉工業大学 松川文豪	東山学園 園長 藤原弘道	東海高等学校 校長 滝俊立 阿弥陀寺住職 神守保育園理事長	青森市本町一―一―一二二 正覚寺 楠美知行
神奈川県仏教会副会長 柴田敏夫 横浜市港北区菊名町蓮勝寺中	だん王法林寺 信ヶ原良文 京都・三条大橋東詰	光明寺 住職 白幡憲佑 横浜市南区庚台(久保山)	西住院 戸川靈俊 京都市左京区黒谷町三〇

舞 見 お 中 暑

保元寺 里見達人 東京都台東区橋場一四七一	称名寺住職 須藤隆仙 〒040 函館市船見町一八一四 電話(〇一三八)二二一一五七八	中島真哉 青山梅窓院 東京都港区青山二二八一三八	無量山伝通院 住職 大河内秀敏
〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二一三六一 清岸寺 原口徳正	華陽院 堀田良謙 〒420 静岡市鷹匠二二四一八 電話(〇五四二)五二一三六七三	近龍寺住職 松濤弘道 〒328 栃木市万町二二一四 電話(〇二八二)二二一〇八〇二	光運寺 飯田信弘 四日市市中部三一二二
野呂幸進 教安寺 川崎市川崎区小川町六番地二 電話(〇四四)二二一四九四六	金田明進 〒302 取手市白山二一九一八 弘経寺	北川一有 〒111 東京都台東区鳥越二一三六 長寿院	専念寺 俵口隆成 京都市左京区西寺町仁王門上ル

二 編集後記 二

○灼熱の太陽のもとに青春の日々を賭ける若者たち。老いて行水あがりの一夕を、浴衣かけで簾椅子にくつろぐ人々たち。思い思いの夏の趣向を味わって、私たちは暑気を払う。時代風俗の変化は、刻一刻を争う激しさではあるが、季節の自然の推移や、それらにまつわりつく人の営みというものは変らない。都市化や機械化が進めば、人の心は反対に自然へと田舎へと戻ろうとする。この夏も八月盆の頃には、いわゆる「藪入り」の風趣もこめて、働らきものの人々は「ふるさと」へと帰るだろう。あるいは人々が長い間に築いてきたなつかしい心の世界へと休らぎを求めて行くだろう。「お盆」の行事は、まさにそうした現代人の心の原点であるのかもしれない。

木洩日の落ち流れる日傘かな 保佳
おもかげは横顔ばかり走馬灯 昭雄
○弊会も会員諸兄の暖かいご支援によつ

て、微力ながらも営々と活動を続けているが、近時永年にわたる『浄土』誌の愛読者から、心暖まるご声援の便りをたびたびいただいている。七月号の誌面「読者の声」欄を飾った清水栄氏などもそうだが、愛知県岡崎市の渡辺杜水氏は、浄土創刊以来の熱烈なる読者であるという。その他、多くの激励の便りを頂戴しているが、なおもさらに皆様からのご支援を期待するものである。

○さて、誌面の中でも紹介しているが、このたび本誌では「浄土俳壇」の欄を十数年ぶり復活することになった。これもかねてより努力している誌面の充実作業の一端であるが、ホトトギス同人の一田牛歌師を選者に迎えて、皆さまのふるつての投句を心からお待ちするものである。この編集後記欄でも毎月二句づつ、季節の秀句を掲載しているが、さらに愛読者諸兄の名句が本誌の一ページを飾ることを、今後の楽しみにしたい。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十三巻

八月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十二年七月二十五日 印刷
昭和五十二年八月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六
発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
振替東京八一八二一八七番
〒一〇三

舞 見 お 中 暑

岸 信 宏

京都市東山 知恩院

浄土宗宗務庁

浄土宗宗務支所

法主 大野法道

大本山 増上寺

大本山 光明寺

法主 石井真峯

大本山 清浄華院

法主 高畠寛我

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

法然上人御降誕地

二十五霊場第一番

誕生寺

岡山県久米郡久米南町里方
中国従貫道路大阪より二時間

西福寺

稲岡覚順

川口市西川口三二四

大本山 善導寺

法主 宮本文哲

敦賀 西福寺
滋賀 福泉寺

鵜飼隆玄

鎌倉大仏殿 高德院

佐藤密雄

祐天寺

巖谷勝雄